

平成 27 年度 看護系学会等社会保険連合研究助成 研究報告要旨

※2500 字程度

【慢性期を見据えた急性期患者の廃用症候群を防止する背面開放座位の効果】

日本看護技術学会：大久保暢子、武田保江、武田利明、水戸優子、小松崎明子、鈴木千晴、井上健、山田亨

- I. **背景**：「^{はいめんかいほうざい}背面開放座位」技術は、急性期患者で術後離床の促進、ICU 滞在日数短縮の効果、慢性期脳卒中患者では脳波、日常生活動作の改善を認めている。本学会は、日本脳神経看護研究学会と協働し、急性・慢性期を横断した脳卒中等の重症もしくは高齢者患者の廃用症候群防止を目的に、同座位の効果検証の計画を立てている。これは、背面開放座位の研究エビデンスの蓄積と背面開放座位の普及を目指すためであり、将来的に診療報酬化を視野に入れた研究活動である。
- II. **研究目的**：脳卒中等で、廃用症候群が予測される急性期患者を対象に、背面開放座位の呼吸器合併症の予防率と筋力維持、意識改善を観察し、急性期からの継続介入により慢性期での廃用症候群予防の有効性の示唆を得る。
- III. **方法**：**研究デザイン**：介入研究。ICU 病棟、慢性期に渡って背面開放座位の介入を行い、対照群との比較検討を行う。**研究協力施設**：500 床規模の救急医療機能病院、**対象者**：ICU に入室する脳卒中患者および人工呼吸器装着患者。**介入内容**：体を起こす看護ケアプログラム(大久保, 2012)の手順に従って、補助具(座ろうくん[®]、Sittan[®]、おきたろう[®])を使用して背面開放座位を早期から導入する。比較対象者は、対照群は従来通りのケアを受ける。ICU 退出後、慢性期病棟において、以下の測定指標の測定を行う。**測定指標**：**急性期**：酸素化(PaO₂ 値, PaCO₂ 値, PaO₂/FiO₂ 比)、呼吸器感染症の有無、ICU 入室から端座位・立位までの日数、ICU 在室期間、FIM, 看護必要度。**分析方法**：統計学的手法を用いて、両群における有意差検定、および継時的変化による両群の差を分析する反復測定分散分析を用いる(有意確立 5%)。
- IV. **倫理的配慮**：急性期患者対象の臨床研究であるため、入院時に家族に説明し代諾を得、意識回復後に本人に説明、同意後にデータとする。慢性期病棟や転院先にも説明を行う。所属機関及び研究協力施設の倫理審査委員会の承認を得た(承認番号 H2507-3)。
- V. **結果**：研究対象者は、対照群 24 名、実験群 4 名をデータ収集できた。現在、実験群のデータを継続収集中であり、最終的には両群同数にして分析を行う予定である。現時点で分析可能なのは、測定指標を用いた対照群の状態分析であった。測定指標ごとに対称群のデータを平均値で算出した。対照群の PaO₂ 値は、研究開始前 114.6±65.8mmHg、ICU 退室時 86.8±15.3mmHg、PaCO₂ 値は、開始時 41.8±7.6mmHg、退室時 40.3±10.7mmHg、PaO₂/FiO₂ 比は、開始時 312.6±129.9、退室時 246.1±83.3 であった。呼吸器感染症については、開始時 4 例認めしたが、退室時は全例に認めなかった。ICU 入室から端座位までの日数は 5.4±6.6 日、立位までの日数は 10.5±11.7 日、ICU 在室期間は 13.3±9.7 日であった。FIM は、研究開始時 24.6±8.7 点、ICU 退室時 46.1±24.5 点、退院時 80.2±43.4 点と改善していた。看護必要度は、ICU 退室 1 週間後 7.8±3.8 点、退室 1 ヶ月後 9.8±4.8 点、退院時 6.8±5.2 点と改善というほどの変化は認めなかった。

VI. 考察及び結論

約 1 年の研究期間であったが対照群設定の介入研究であることから、予定数の収集が困難であった。対照群の収集は終了していることから、実験群データを今後も収集し続け、研究デザインを変更することなく、診療報酬改定の申請に必要な研究結果を出していく予定である。対照群データから、呼吸器感染症は ICU 退室時には無くなっており、他測定指標も継時的に改善している。両群の検定時に、継時的な有意差が出ない可能性があるため、ICU 退室時の生活行動動作は、FIM 以外に看護記録からも収集する必要がある。患者属性の多様性が見られ、両群での属性の有意差が見られる可能性が高い。それを想定し統計学者や臨床研究のスーパーバイズを受けながら進めていく必要がある。